

三井のリフォーム住生活研究所所長 西田 恭子

頼もしい女性プランナー達

リフォームの仕事はなかなか大変だ。

図面がない建物も多いのだが、あっても既存図面にはなかった柱が、解体するに出てきたり、新築なら最後につける照明器具がはじめから付いていて、工事中に職人さんが壊してしまったり…。

失敗事例として言われなき責任を取らざるをえないことも多い。そんな避けられない失敗談を見聞きしていると、何で大変なことが多いリフォームの仕事をしているのだろうか？と思うのだが、先日ある名古屋のリフォームプランナーが言っていた。

「老朽化した物件に命を引き込むことが出来、お客様と一緒に住まいについて、徹底的に話しをし、出来上がったものを見て驚き、感動する瞬間に立ち会うことが出来る喜びは、何にも変えがたく、この仕事をしていて良かったな！と感じます」と。

「セカンドライフ・夫婦ふたりでゆったりすごす家」をテーマにリフォーム設計をした彼女が、物件紹介をしている中の言葉

だ。気負うでもなく、誇大に語るわけでもなく、淡々とした口調ではあったが、その言葉の重みは実感を持って伝わってきた。

住宅リフォームは、設計手法やデザイン力を駆使するだけでは成立しない。

夢の実現もさることながら、今までの暮らしの歴史をどう継承し、今後につなげるかが大事だ。特に定年を迎える夫婦の暮らしは、新婚時と同じほどの心の準備がある。本当にこのまま夫婦別寝室でいいのか？

今後妻だけが食事をつくりつづけるのか？ リタイア後の夫の居場所はあるのか？ などなど。

最終章の暮らしを考えたときのそれぞれの思いを汲み取り、設計に反映し、ご提案する。そしてそれが、実際のものとして形をなし、そこでセカンドライフのスタートがきられる。

彼女はきっと大きな責任を感じながらも、誠実に仕事をこなしたのだろう。

リフォームの世界ではまやかしの言葉は通用しない。実際の物件で「生活基

地」を創りだし、喜んでいただいた手ごたえがあってこそ言葉だろう。

そんな仕事の醍醐味に気がつき、憧れを抱く人も増えてきた。今まで私に付いてくれたアシスタント達も、「ダイレクトにお客様と接し、その方のためになる仕事の魅力です」と、口をそろえる。今やそれぞれ立派に設計の仕事をしているが、先日、「仕事そのものを教えていただきたいことも感謝しています。が、それより何より、女性でもこんなに頑張れるんだ！ ということが今の自分を支えています」と言っていた。

「今どき男も女もないでしょう」と言いそうになったが、確かにリフォームの仕事は女性ならではの視点が求められ、その頑張りが高く評価される。この業界を支える頼もしい女性達が、次々と育っている。



西田恭子氏のプロフィール―一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。